

## 学生大使 実施報告書

氏名：荒明桃香

学部・学科（コース）・学年：

人文社会科学部 人文社会科学科 グローバル・スタディーズコース

派遣先大学：ベトナム国家農業大学

派遣期間：2023年9月5日(火)～2023年9月18日(月)

### 1 日本語教室での活動内容

日本語教室は、ベトナム国家農業大学の「日向クラブ」という日本語を学習するクラブのメンバーを中心に、平日の午後6時から午後7時半の時間帯で行われた。日本語を学習するメンバーは、日本での留学経験、長年の学習などの理由で流暢に日本語を話す方もいれば、これまで一度も日本語を勉強したことがない方など、それぞれの日本語のレベルはさまざまであった。指導がうまくいくのかという不安はあったものの、日本語学習者の中で学習度合いが近いグループを3つ作り、自分を含めた3人の日本人がそれぞれのグループの中で主導となり、活動を進めた。私は日本語学習を始めて間もない方が集まったグループを受け持つことが多かったため、ひらがなの書き方や発音の仕方、日本語での簡単な挨拶や数字といった内容の授業を行った。現地の学生は日本語を学ぶことに熱心な方がほとんどであったため、自分自身もその熱意に負けないよう、山形大学で学んだ教職課程の知識や教育実習での経験を活用しながら指導を行った。同時に、現地の学生に対しベトナムの文化やベトナム語に関する質問を投げかけ、自分自身も学ぶことを忘れないよう心がけた。現地の学生からは、「楽しかった」というような前向きな感想があり、自分のアプローチがうまく届いていたことに安心した。

### 2 日本語教室以外での交流活動

日本語教室以外の時間では、現地の学生が食事や買い物、観光へと案内してくれた。食堂のメニューや物の値段や現地の方の言葉など、日本人の私だけでは理解できない部分を現地の学生は日本語や英語、翻訳アプリを用いて説明してくれた。彼らがおすすめしてくれた食べ物はどれも美味しく、毎日一緒に食べるご飯がとても楽しみであった。買いたいものがあると、「一緒に行きましょう」と言って親切に連れて行ってくれた。週末はハノイ市街地やホーチミン廟、陶芸の村であるバッチャン村などへ訪れ、ハノイをより楽しむことができた。食事へ向かうまでの道やバスの中、ちょっとした空き時間などで双方の文化や考えを話すことが多く、少しずつ交流を深めることができた。また、英語学科の授業に参加し、日本語や日本の文化などを英語で説明する機会があった。去年英語圏の国に1年間滞在していたものの、英語は帰国から半年ほど話していなかったため、上手く話せるかどうか不安であったが、自分が思っていたよりもスムーズに言葉が出てきて、学生と対話を図りながら授業を進めることができた。授業のなかで私は山形県に関する資料を作成し現地の学生に紹介を行ったが、彼らが予想よりもはるかに興味を持ってくれたようだった。自分の持っている英語運用能力とプレゼンテーション能力が十分に発揮できたという点で、この日の活動が特

## 【学生大使 実施報告書】

に自分のなかで印象に残っている。

### 3 参加目標への達成度と努力した内容

今回この活動を通して、自分の知らない世界や価値観にふれ、自分のなかにある常識の枠組みを壊すことが目標であったが、見たことのない食べ物やこれまで教科書で読むだけであったベトナムの歴史、そして現地の学生との対話によって、新たな文化や価値観を知ることができ、目標は達成されたと考える。非常に愛国心が高く、人間関係を大事にする国民性を街中や現地の学生から学ぶことができた。滞在中、疑問に感じたことは現地の学生に質問をして知識を増やそうと努力を続けた。その結果、今回の目標を達成することができたと考える。また、言語が通じない環境ではあったが、売店の店主の方などにベトナム語で挨拶をすることも心がけた。相手から笑顔で挨拶を返された際は、勇気を出して挨拶をして良かったと思えた。それと同時に、言語は大きな壁であることを強く実感した。現地の学生が常に一緒に行動してくれたため、不自由なく過ごすことができたが、ベトナムのなかで自分は外国人であり、1人では何も自分の考えを伝えることができない。そのような立場の人をサポートできるような力を身につけることを1つの新たな目標としたい。

### 4 プログラムに参加した感想

このプログラムを通して、今自分の持っている力を十分に活用し、実りある経験をすることができた。個人的な話にはなるが、私は去年休学したため、現在学校に友人はほとんどおらず、物足りない学生生活を送っていた。しかし、今回学生大使のプログラムに参加し、一緒に渡航した学部生の2人やベトナム国家農業大学の学生らと出会い、実りある2週間を過ごすことができ、学生最後の夏休みに将来忘れられないような思い出ができた。プログラムの中の全ての出会いに感謝している。しかし、さまざまなことに挑戦しようとする気持ちが強かった故に、後半は体調を崩していた。薬を服用し耐えていたが、帰国後も体調不良は続いた。おそらく渡航前の期待と現実のギャップが自分の中で少し大きかったのではないかと考える。そのようなギャップと向き合える強い心と身体があれば良かったと感じる。

### 5 今回の経験を踏まえた今後の展望

今回得た数多くの知識や経験は今後の卒業論文、そして卒業後の生活へと活用していきたいと強く考える。この学生大使のプログラムに限らず、これまで外国で一定期間過ごしたことで、日本で普通とされることが海外では普通ではないことを学んだ。固定観念にとらわれずに、柔軟な思考を持って相手との交流を図っていくことが求められる。今後も現地で出会った友人とは交流を続け、相手の文化や歴史を学び続けていきたい。また、相手を知ることによって新たな自分を見つけることができるのではないかと考える。自分のナショナリティである日本についても学びを深め、社会に貢献できる人間になれるよう残りの学生生活を悔いなく過ごしていきたい。また、今回現地の学生が私たちに温かく歓迎し、優しく接してくれた。在学中はおそらく不可能であるが、この恩をいつか社会人になってから何らかの形で返せるよう、努力を続けていきたい。

【学生大使 実施報告書】



【学生大使 実施報告書】

